先進校に学ぶキャリア教育の実践

“2巡目の壁”を越え進化するPBLを軸に7つの力の段階的な育成を目指す

羽水（うすい）高校
（福井・県立）

羽水高校は、学校教育目標として、7つの力「USUI7」の育成を掲げています。
その育成の中心に位置づけられるプロジェクト学習（PBL）は、2016年度から開始。
新鮮さと勢いで走れた時期が過ぎ、取組の2巡目で顕在化してきた数々の課題を乗り越えようとしています。

取材・文／藤崎雅子

実践のKeyword

プロジェクト学習　総合的な探究の時間　目的・目標の共有　生徒の主体性
地域との協働　多様な大人との出会い

自己肯定感の醸成を重視し、目標設定

福井市にある普通科単独校の羽水高校は、これからの社会を生き抜くための7つの力（自己肯定感・傾聴力・省察力・協働力・課題発見力・課題解決力・市民性）を「USUI7（ウスイセブン）」と名づけ、学校教育目標として掲げている。2018年に生徒に育みたい力についての意見を全教員から集め、「協働的な活動に前向きで粘り強い一方、やや控えめなところがあり、思考の言語化や批判的思考には課題がある」といった生徒の特徴を踏まえて設定したものだ。この設計に携わってきた探究企画部・永田卓裕先生は、同校は7つの力のなかでも特に「自己肯定感」を重視していると話す。

「本校入学者の多くは、良くも悪くも目立つ経験をあまりしてこなかった生徒たち。3年間のさまざまな経験を通して自己肯定感を高め、この先自分を信じて進んでいく力を身につけてほしいと考えています」

20年度からは、これを学校全体で一層の意識化を図っていこうと、学年ごとの重点項目を設定して3年間のステップアップを体系化（図1）。さまざまな活動への浸透を図っているところだ。

地域とつながるPBLをゼロから立ち上げ

現在まで「USUI7」の育成の中心を担ってきたのは、総合的な探究の時間（当初は総合的な学習の時間）に展開しているプロジェクト学習（以下PBL）だ。「生徒の心に火をともしたい」という校長のリーダーシップに、当時の総合的な学習の時間の内容に課題感のあった担当分掌が呼応するかたちで、16年度からスタート。まだ全国的に探究活動の実践例が少ない時期に、ゼロから手探りで構築してきた。

卒業後に地元に残る生徒が多いことを受け、地域とのつながりを学びの核に設定。まず1学年に、福井市役所の出前講座を活用して市内の課題解決策を考えるPBL「市役所に提案！」を立ち上げた。翌17年度は、2学年で進路希望に基づく学問探究を行い論文にまとめるプログラムを開始。18年度には「市役所に提案！」の連携先を市役所以外の事業所等にも拡大し、生徒が自ら行きたい場所に直接依頼してフィールドワーク（以下FW）を行う方法にするなど、着実に内容を充実させてきた。そのなかで、企画担当の分掌（現：探究企画部）には「多くの生徒が新たな発見をし、社会に対する興味・関心を抱いている」との手応えがあったという。

「続ける意味は？」さまざまな課題が顕在化

しかし、勢いで突き進んだ3年間が過ぎた19年度春、PBLの推進を強力に牽引してきたリーダー教員が他校に転出。同時にさまざまな課題が一気に噴出した。「生徒に課題を本気で解決したいという主体性や一生懸命さが感じられない」「自分がPBLで何をやってきたか覚えておらず、話し合いが進まない」「論文はインターネッ

School Data

1963年設立／普通科
生徒数879人（男子480人・女子399人）
進路状況（2021年3月卒業生）
大学287人・短大4人・専門学校33人
就職3人・その他17人
福井県福井市羽水1-302
TEL 0776-36-1678

Outline

生徒数約900人の比較的大規模な普通科単独校。2015年度よりOECD日本イノベーション教育ネットワーク（ISN）に参加（20年9月末第2期終了）。16年度より総合的な学習の時間にPBLプログラムを導入。生徒の特徴を踏まえ、修得を目指す資質・能力を掲げた学校教育目標「USUI7」を設定し、PBLを中心とした学校教育全体での育成を図っている。

同部（1学年担当）
松田充弘先生

同部（1学年担当）
永田卓裕先生

同部（2学年担当）
髙嶋郁子先生

同部（2学年担当）
髙橋美由紀先生

同部（3学年担当）
谷口典雄先生

探究企画部 部長
澤田則義先生

トからのコピペばかり」…校内外から厳しい意見が担当分掌に届くようになった。当初より連携してきた市役所からは「毎年300人の受け入れはきつい」「いつまで続くのか」。教員からも「教員の負担が大きすぎる」「進学校がここまでやる必要はあるのか」といった声が上がるようになった。

「立派なワークシートと素晴らしいプログラムができ上がったが、それだけではうまくいかない。プログラムに魂を込める必要性を痛感しました」（谷口典雄先生）

教員が語り合い取組に魂を込める

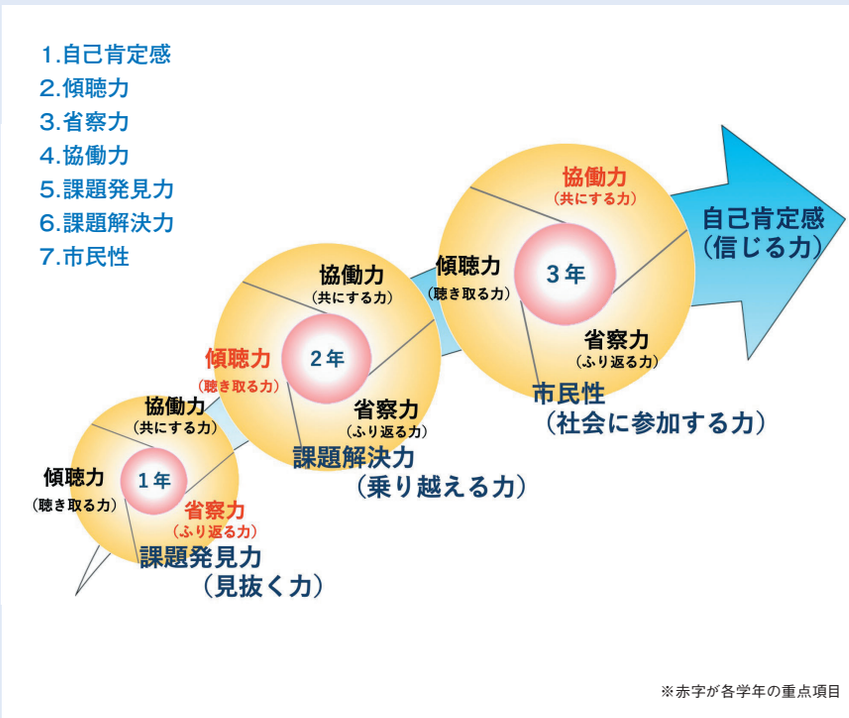
残された分掌メンバーは、混乱に陥りながらも、PBLを「メンバーが入れ替わっても取り組まれ続けるものにしていきたい」と動き始めた。

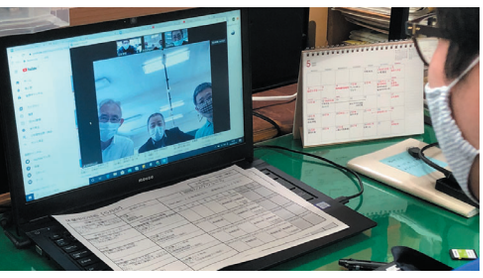
「PBLの取組を、単に業務を引き継ぐのではなく、学校の〝文化〟として継承していきたい。それには、先生方一人ひとりと、なぜPBLの取組が必要なのか、どう生徒を成長させるかを共有し、学校全体が一つのチームとなることが必要だと考えました」（永田先生）

そこで力を入れたのが、〝語り合う場〟としての教員研修だ。この2年前より、同分掌は教員自主研修会を実施していた。希望者がマグカップ持参で集まり、視察・研修報告やゲスト講師の話を基に、グループに分かれて意見交換するという内容だ。自由に発言できる雰囲気の中、グループ討論は大いに盛り上がり、生徒や学校への思いを共有する場となっていた。

19年度、その対象を全教員に拡大。「USUI7」やPBLの意義などをテーマに年間5回開催した。20年度のコロナ禍による臨時休校期間中には、オンラインでつながり、生徒の視点に立って学校・教員として今できる支援について共有。また、PBLにありがちな場面を挙げてどう対応するとよいかを話し合う、指導に直結する内容でも実施した。

図1 学校教育目標～これからの社会を生き抜く力「USUI7」の育成～





20年度の臨時休校時にはオンラインで教員研修を実施。

※先生・生徒の所属・学年などは取材時のものになります

現在、PBLのフィールドワーク先は、県庁、市役所、地域の企業、公共施設、個人の方など多岐にわたる。

探究企画部メンバーの髙嶋郁子先生は、そのなかで教員のPBLへの向き合い方が変わってきたと実感している。

「以前は遠慮がちに現場の先生方に『お願い』するという状況でしたが、積極的に携わってくださる先生が年々増えています。生徒と一緒にPBLを楽しむようになってきたのではないでしょうか」

取り組む教員たちによって、プログラムに魂が込められていく。

「コロナ禍のように、私たち教員が経験したことのない課題は今後ますます増えるでしょう。それを乗り越えるためのカギは、スーパーティーチャーの存在ではなく、教員それぞれがもつアイデア。それを共有する語り合いの場はとても大切だと感じました」(永田先生)

「個」を重視したチーム活動へ

一方、PBLの実施内容についても、19年度の途中から見直しを図り、20年度は次のような内容で実施した。

まず、1学年初めの「PBL基礎」で、思考やプレゼンの技法を学ぶとともに、新聞記者による講演会などによって社会課題に目を向ける。その上で、FWなどで生の情報に触れながら、「市役所に提案!」を発展させた「地域に提案!」のPBLにチームで取り組む。そして2学年の終わりに、各自でそれまでの活動を振り返り省察論文をまとめる(図2)。

改善ポイントの一つは〝個を大切にする〟ことだ。生徒一人ひとりがテーマに一層興味がもてるよう、従来のクラス別テーマ設定をやめて、各自が「探究したい領域」を選んで自由なテーマに取り組む方法に変更(図3)。チームの人数は5~8人から3~4人に減らし、全員参加型を目指す。また、FWを経てテーマ設定するまでの期間を長く取り、課題に対する理解を深めることに注力する。また、チームの取組においても個人の活動を重視。「地域に提案!」はクラスを解体してチームを編成して取り組むが、その活動報告をクラスメイトに一人ずつ報告する場を設定した。

「いざ一人になるとわからないこともあり、『人に任せてしまっていた』『主体的に考えられていなかった』ことなどに気づいたという声があちこちから聞かれました。活動を改めて自分の中に落とし込む良い機会になっています」(髙橋美由紀先生)

そうして、PBLで何を学んだか、どう成長したかを個人でまとめる省察論文につなげる。

「以前2学年で行っていた『学問探究論文』と違い、自分の経験が題材なので、どこかからのコピペでは書けません。オリジナルの言葉でまとめる経験を通して、しっかり振り返りを行ってほしいと思います」(永田先生)

魅力的な大人と出会う機会と地域連携を捉え直す

もう一つの改善ポイントは〝地域との関係性の捉え直し〟だ。

「PBLの目的は、地域の現状について知識を増やすことでも、課題を解決することでもなく、学習過程で生徒の資質・能力が育成されること。生徒が魅力的な大人

図2 羽水高校PBLの流れ(2020年度)

※コロナの影響により一部計画を変更して実施

図3 探究テーマの例(2020年度1学年)

- 大雪時の市民の取るべき行動(防災・災害領域)
- 行事を通して地域が発展するために若者たちの力をどう取り入れるか(地域づくり領域)
- 今ある観光地をどのようにSNSで広めるのか(観光領域)
- 若者が農業の中心に立ち、スマート農業を活性化(農業・畜産領域)
- 男性は育児休暇を取れないのか、取らないのか(女性活躍・子育て領域)

と出会うことが、最も重要な地域と関わる意義ではないかと考えるようになりました」(永田先生)

PBLでの連携先の拡大を図るとともに、コロナ禍で訪問が困難となった際はオンラインインタビューを設定するなど、地域の多様な大人と出会う場の創出に力を入れている。

「自分の仕事に誇りをもって一生懸命取り組む地域の皆さんに出会い、話をすることで心を動かされる生徒はたくさんいます。そういう機会をいかに設定するかが、教員の仕事ではないかと思います」(松田充弘先生)

また、生徒のFWを機に生まれた事業所・個人との関係性を活かして、節目に開催する報告会にもアドバイザーとして招いている。そこで生徒は厳しい意見をもらうことも多い。例えば、福井の観光の振興をテーマに取り組んだチームは、SNSの活用を検討したが、中間報告会でアドバイザーに「新鮮味ゼロ」と厳しい指摘を受け、必死になって練り直した。

「地域の方にダメ出しをしてもらうことで、課題の本質に気づき、やり直そうという意欲につながる。失敗を繰り返し、スパイラルのように成長していってほしい」(澤田則義先生)

「地域に提案!」の課題設定報告会(ポスターセッション)の様子。

アドバイザーの方からの指摘…「新鮮味ゼロだ

「高校生が観光アカウントをつくる」
情報の氾濫するSNSでは埋没する

生徒のプレゼン資料より。地域からの指摘を機にさらに検討を深めた。

自分の探究活動の未熟さを思い知る(ToT)!!

必死になって考え直しました…

やり遂げた経験が次の一歩を踏み出す力に

PBLのプログラムは2年間で終わるが、最近では、3年生になって自分の進路を本格的に考え始めたとき、「PBLで関わった地域の方にもっと話が聞きたい」と個人的に行動を起こす生徒もいる。また、市や地域の団体が主催するプログラムに手を挙げて参加するなど、活動の幅を広げる生徒も増えてきた。「チャレンジしたいが勇気の出ない生徒の背中を押すことも教員の役割」と言う髙嶋先生が、外部イベントを紹介した生徒は、1年間継続して熱心に参加し、「やりたいことがいっぱいできた」と将来への希望を膨らませている。

「子どもたちはアレンジするのが得意。一度PBLのプロセスを経験しておくことで、高校時代に飛び出すタイミングが得られなかった生徒は、卒業後にやってみたいと思えることができたとき、そのための一歩が踏み出せれば、それでいい」(永田先生)

同校が最も重視する「自己肯定感」の向上にも、手応えを感じる教員は多い。

「社会課題を自分ごととして取り組み、最後には活動を振り返り論文として言語化することで、自分がやってきたこと・学んだことがくっきりし、誇りになっていると思う。それは次に何かにチャレンジするときのエネルギーになるのではないでしょうか」(永田先生)

授業を含む学校全体で目指す力を育成していく

今後、さらに生徒を成長させるPBLへの進化に向けて、「他校の生徒との交流も入れていきたい」(松田先生)など、新しいアイデアも出ている。こうした改善に加えて、教員が〝生徒の力を信じる〟ことも欠かせないという。

「教員の『本校の生徒には無理』という先入観は、思い切った取組を阻む壁になる。しかし、生徒は機会さえあればできるのだと、これまでのPBLでわかってきました。まず信じて任せてみる。失敗しながらも諦めずに取り組む生徒の姿を見て、先生方のムードも変わるはず。そうして生徒が成長できる環境を整えていきたいと思います」(永田先生)

同校が掲げる7つの力の育成に向けて、PBLだけでなく、授業を含めた学校教育全体で取り組んでいこうという気運も高まっている。

「授業や学校行事、部活動など何でもいいので、生徒が自分なりの挑戦をし、成功も失敗も経験する。そこで自分が何をしてきたか、どう成長したかを誰かに語りたくなる。そんな学びの機会を、学校全体で提供していきたいですね」(永田先生)

Interview

今も、将来も、やりたいことがいっぱい

PBLを通じて、「理想と現実は違う」という難しさと、探究する楽しさを知りました。だから、市が高校生対象に定期開催しているワークショップがあると聞いたとき、面白そう! と直感し参加しました。そこで魅力的な大人の方とたくさん出会い、「これもしたい」「あれもしたい」「この人みたいになってみたい」…と、今やりたいことがいっぱいです。将来のやりたいこともいっぱいあってまだ決まっていませんが、自分がいろんな人に助けられてきたので、今度は私が誰かの力になることをしていけたらと思います。
(2年生・塩谷倫加(しおたにりんか)さん/写真左)

より良いアイデアには、自分の意見も必要

中学生までは積極的に意見を言うタイプではありませんでした。反論されると、自分がダメな人だと否定されたように感じていたからです。でも、高校で、地域の方や他校の生徒などと意見を交わす機会が多くあり、「お互いの考えを共有することでより良いアイデアを目指していけばいい。自分の意見もそのために必要なピースの一つなんだ」と考えるようになりました。卒業後は大学に進学し、地域課題解決について学ぶ予定です。時々、羽水高校のPBLにも顔を出して、本気で議論する楽しさを伝えたり、一歩踏み出せない後輩の背中を押したりといった活動をしていきたいと思います。
(3年生・片岡 礼央(れおな)菜さん/写真右)

※先生・生徒の所属・学年などは取材時のものになります